

「おもいおもいのおもいおもい」

— 「対話」のもつ「ちから」を信じ続けて

日本福祉大学

木全和巳



「自分のことって意外とわかりにくい」

わたしのゼミにいる自閉スペクトラムと診断を受けている学生の言葉です。一人ひとり、卒業論文のテーマを発表する時に、自分が診断を受けていることを書き、彼は彼なりに「自閉症」のことを調べてきました。これだけでも、支援センターの職員たちからはよくやれたねと評価されました。でも、発表の内容は、ネットから抜き出した「自閉症」の特徴が並べられているだけ。わたしは、「診断を受けても一人ひとり特性がちがう。自分で、どこが当てはまつていて、どこが当てはまつていないと思う?」と、問い合わせてみました。「うーん」とうなりながら沈黙。しばらくして彼の応答は、「自分のことって意外とわかりにくい」でした。

ゼミ生のなかには、学童保育や放課後デイなどで、こうした特性をもつ子どもたちと関わりがある学生たちもいます。

「対話」は「他者」との「語り」のやりとり

わたしたち一人ひとりは、自分の人生や生活に対し、こなりたい、こうしたいというねがいをもっています。こうしたねがいは、言葉なりしぐさなりの表出を通して、おもいとして他者（たち）に受けとめてもらえて、初めて表現となります。

「対話」は「他者」との「語り」のやりとりです。「語り」には、耳を傾け、おもいを受けとめわかちあい、できごとを共有する「他者（たち）」という「聞き手」の存在が不可欠です。また、「語り」には、語り手ならではの固有の「物語」が含まれています。少しおおげさですが、たつた一度の人生の主人公である「体験」を潜らせたかけがえのない「物語」が「経験」として語られます。「対話」のなかでは、こうした「物語」の断片がやりとりされます。デンマークの小説家アイザック・ディネーセンは、「どんな悲しみでも、それを物語に変えるか、それについて語れば耐えられる」という言葉を残しています。

「語る」ことを通して、「自己」とも「対話」をしながら、気もちとできごとの整理をしつつ、自分自身に「これでいいんだ」と確認を与えていくことができます。共感的にわかりあうことで、新たな気づきや学びが生まれます。そして、こうした「対話」を通して、「他者（たち）」ともつながり、そのつながりも豊かになってしまいます。

気もちの受けとめあい、わかちあいもできます。何よりもま

ずはこの気もちの受けとめあいであり、わかちあいが大切です。気もちを受けとめあい、わかちあいができるいくと、自分のなかに「落ち着き」が生じます。少し気もちに「ゆとり」ができると、「なんで」「どうして」「どうなつていいの」という「ふりかえり」の「問いか」が「対話」を通して自分のなかに生まれてきます。「ゆとり」がない時は、「どうしよう」「どうしてくれる」「どうしたらいいの」という「方法」の「問いか」が空回りしがちです。こうした感情のわかちあいを通して、たとえば、「苦しい」という「生きづらさ」をもたらすものについての洞察も少しずつ深まっていきます。

「自分の話をしなさい」

「自分の話をしなさい」。池袋でホームレスの支援を続けている精神科医森川すいめいさんが、「オープン・ダイアローグ（開かれた対話）」を学ぶために、フィンランドで研修を受けた時に、スタッフから言われた言葉です。森川さん自身、父からの暴力に苦しんできた当事者です。「オープン・ダイアローグ」は、フィンランドのケロダ・ブス病院で始めた「対話」を重視する「ケアの手法」です。はじめは、「クライエントのことについて、スタッフだけで話すのをやめる」という取り決めから始まりました。そして、複数のスタッフとクライエントらが「対話」を重ねていくという実践が始まっています。

研修スタッフは、「自分の話をしなさい、あなたは誰なの